

三加和町文化財調査報告 第15集

田中城跡

XIV

1999

熊本県玉名郡
三加和町教育委員会

文化課

三加和町文化財調査報告 第15集

田中城跡

XV

1 9 9 9

熊本県玉名郡
三加和町教育委員会

序

田中城跡の調査も10年を過ぎ、いろいろなことが分かってきました。昭和61年に主郭の調査を行って以来、城の西側から南側へと調査を行い、昨年度から主郭の南側に数段造られている平坦部の調査を行っています。

昨年度の調査で非常用通路と思われる遺構が確認されましたので、その延長が主郭近くまで延びている可能性を考え、調査を行いました但確認はできませんでした。その他の遺構は全く確認できず、この一帯がどのような性格を持つのか不明のままです。

遺物は鉄砲の玉が7個出土し、昨年度分と合わせてこの一帯だけで25個も出土したことになります。そういう意味では、主郭直下ということもあり、守りを固めていたのでしょうか。

専門調査委員の先生方のご指摘もあり、今年度から面としての調査を実施していますので、今後、新たな発見があることが期待されます。

今後も、皆様方のご指導・ご協力をよろしくお願い致します。

平成11年3月

三加和町教育長 今村 憲夫

例 言

1. 本書は熊本県玉名郡三加和町が「田中城総合整備計画」の一環として、平成10年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、国庫・県費補助事業として三加和町教育委員会が実施し、黒田裕司がその任にあたった。
3. 遺物及び遺構の実測・製図・拓本・写真撮影は黒田が行った。
4. 調査の方法・遺物に関しては、専門調査委員のご教示を得た。
5. 出土遺物は、三加和町教育委員会で保管している。
6. 本書の執筆・編集は黒田が担当した。

本文目次

第Ⅰ章 序説	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査組織	1
第3節 調査計画	3
第Ⅱ章 調査の成果	7
第1節 調査の概要	7
第2節 遺構と遺物	7
〔Ⅰ区〕	7
(1) 遺構	7
(2) 遺物	7
〔Ⅱ区〕	8
(1) 遺構	8
(2) 遺物	8
〔Ⅲ区〕	8
(1) 遺構	8
(2) 遺物	8
その他の遺物	8
第Ⅲ章 まとめ	10
報告書抄録	20

挿図目次

第1図 田中城跡全体図	2
第2図 遺構配置図	5
第3図 出土遺物実測図	9

写真図版目次

- 図版 1 (1) 調査前状況 (I・II区、南東より)
(2) 調査前状況 (I・II区、北東より)
(3) 調査前状況 (III区、南東より)

- 図版 2 (1) I-1区 (東より)
(2) I-1区 (北西より)

- 図版 3 (1) II-3区 (東より)
(2) II-3区 (東より)

- 図版 4 (1) III-1区 (北西より)
(2) III-1区 (南東より)

- 図版 5 (1) III-2区 (北東より)
(2) III-2区 (北西より)

- 図版 6 (1) III-2区柱穴検出状況
(2) III-2区柱穴完掘状況

- 図版 7 (1) 出土遺物
(2) 鉄砲玉

第I章 序 説

第1節 調査に至る経過

昨年度の調査では、主郭から南西方向に延びる尾根筋を切るように塹壕跡と思われる遺構とこの塹壕跡から北東および東方向に延びる二本の通路状遺構が確認された。これらの遺構は、いずれも地山の凝灰岩を削って造られており、塹壕跡は特に丁寧に整形されているように感じられた。また、調査区から18個もの鉛製の鉄砲玉が出土し、鉄砲を使用した激しい戦いが行われたことが推測された。

平成元年に山口県立文書館で『迎春・和仁仕寄陣取図』が発見されて以来、この絵図が西側から描かれていると思われるため、絵図と対比するように城の西側を中心に調査を行ってきた。しかし、昨年度実施した専門調査委員会において、点としての城の遺構は見えてきたが、全体を把握するにはこれまでの調査箇所の間を埋めるような場所を選んで調査し、つながりを持たせる必要があるのではないかと指摘を受けた。当初は、絵図に描かれている主郭部分から延びる線を地形線と推測していたが、昨年度の調査で確認された通路状の遺構のうち塹壕跡から南西方向に続くものを、この線に当てはめられないかとの意見があり、現地で検討したところ尾根の裾に沿って主郭部まで続いている可能性も考えられた。そこで、これまでの調査計画を見直してこの遺構の延長を確認することを優先することにした。

第2節 調査組織

- 調査主体 三加和町教育委員会
調査責任者 今村 憲夫（教育長）
調査事務 小山 暁（社会教育課課長）
 荒木 和富（社会教育主事・参事）
調査員 黒田 裕司（社会教育課参事）
専門調査委員 石井 進（東京大学名誉教授）
 大三輪龍彦（鶴見大学文学部教授）
 田邊 哲夫（玉名市立歴史博物館館長）
 工藤 敬一（熊本大学文学部教授）
 北野 隆（熊本大学工学部教授）
 阿蘇品保夫（八代市立博物館館長）
 大田 幸博（熊本県文化課主幹）

調査協力者 中村幸史郎（山鹿市立博物館副館長）



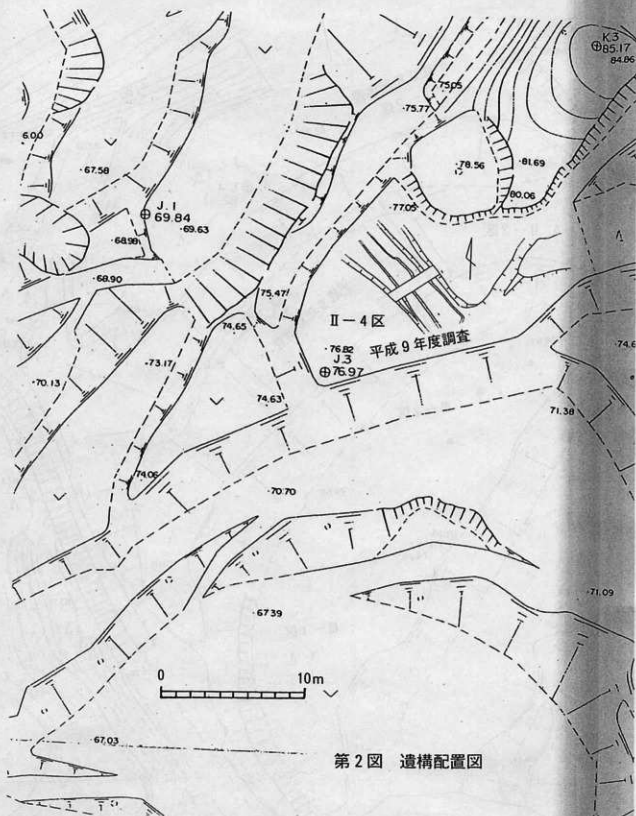
第3節 調査経過

- 5月30日 鹿本郡鹿町内田小学校PTA見学(19名)。
6月5日 熊本市西原町婦人会見学(24名)。
11日 熊本県企画開発部文化企画課視察(6名)。
9月1日 宮崎県高岡町教育委員会視察(8名)。
18日 熊本市立博物館友の会見学(43名)。
29日 退職校長会見学(6名)。
10月1日 プレハブ建設。
5日 平成10年度調査開始。
昨年度の調査で残っていたⅠ-1区から調査を始める。
14日 鉄砲玉が1コ出土。今年も多量に出土しそうだ。
15日 Ⅰ区の遺構確認を始める。
24日 チャレンジバンブークラブ見学(25名)。
25日 山口市吉敷毛利と三加和史跡愛好会の交流会(約120名)。
27日 昨年度に引き続き遺構が全く確認できないため、トレンチを入れて土層を観察して旧地形を確認することにする。
29日 ギャラリー「蔵」より見学(37名)。
30日 この段も整地を行って、平場の面積を広めているようである。
11月9日 昨年度調査したⅡ-4区の排土をⅡ-3区に残していたため、これを除去して調査し、非常用通路と思われる遺構の延長を追うことにする。
15日 三加和町青年団主催ウォークラリー開催(約170名)。
17日 「三加和町郷土史講座」受講生見学(14名)。
20日 松本健郎・川上康治熊本県文化課課長補佐視察。
26日 主郭よりの崖面側から凝灰岩の岩盤が確認され、昨年度確認された非常用通路と思われる遺構の延長が確認された。
12月3日 通路跡と思われる部分を掘ってみたが、主郭側には続いていないようである。
7日 作業員が6名となり、久しぶりに現場が活気付く。
Ⅲ区を東西に二分割し、西側のⅢ-2区から表土剥ぎを始める。
14日 Ⅰ-1区の埋め戻しを始める。
15日 Ⅲ-2区から柱穴が6コ確認できたが、構築物を構成するような並びは確認できなかった。
遺物もほとんどなく、土師器皿・火舎などの小片が出土するのみ。

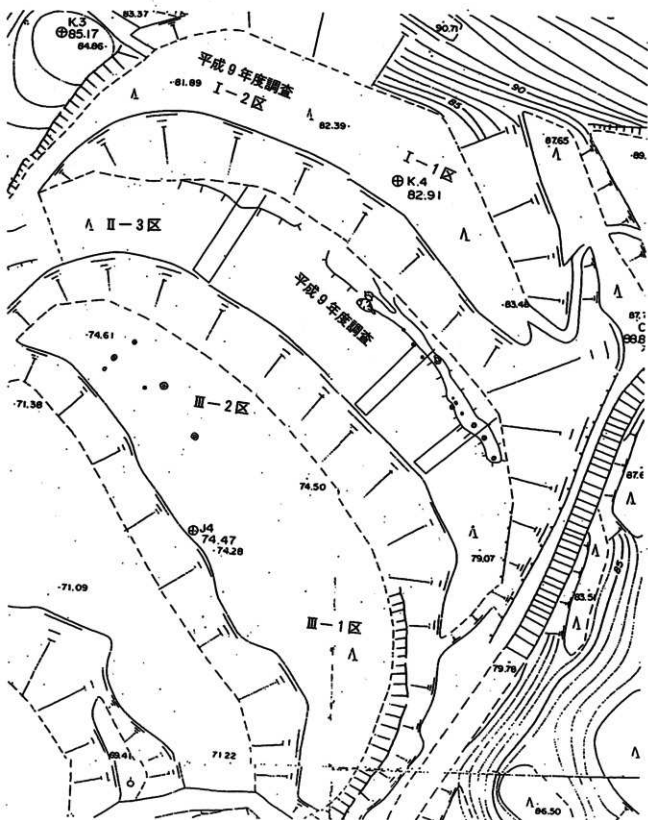
- 17日 Ⅲ-2区の遺構実測を行い、埋め戻しにかかる。
- 22日 Ⅲ-1区の表土剥ぎを始める。

平成11年

- 1月6日 作業再開。
- 8日 Ⅲ-1区の遺構確認を始める。
- 18日 遺構が全く確認できないため、もう少し掘り下げてみることにする。
- 25日 Ⅲ-1区清掃写真撮影。全く遺構は確認されない。
Ⅲ-1区の埋め戻しを始める。
- 26日 Ⅱ・Ⅲ区間の斜面の土層を確認するためトレンチを入れてみたが、中段部分に平坦面が造られている。
- 28日 埋め戻し中、鉄砲玉が2個見つかる。
- 2月9日 Ⅱ-3区の埋め戻しを始める。
- 11日 戦国肥後国衆まつり見学者多数見学。
- 23日 宮崎県佐土原町文化財保護審議委員視察（6名）。
昨年確認された通路が主郭方面に延びていないかを確認するため、Ⅰ・Ⅱ区間の斜面にトレンチを入れてみる。
- 3月1日 Ⅰ・Ⅱ区間の斜面には、通路は延びていないことを確認。
- 2日 Ⅱ-4区の埋め戻しを始める。
- 5日 松橋町文化財保護委員視察（5名）。
- 8日 山鹿市三岳地区公民館より見学。
- 12日 城南町歴史民俗資料館講座受講生見学（22名）。
- 13日 山鹿市立博物館より見学（19名）。
- 23日 Ⅱ・Ⅲ区間斜面を埋め戻す。
- 25日 Ⅰ・Ⅱ区間斜面を埋め戻す。
- 30日 専門調査委員会。



第2図 遺構配置図



第Ⅱ章 調査の成果

第1節 調査の概要

昨年度は主郭南側掘部に形成された階段状の平場を調査したが、各段の面積が狭いうえ排土場の関係で全面を一度に剥ぐことが出来なかったため、天地返ししながらの調査となった。それでも各段で掘り残しがでてしまい、段ごとの全面遺構確認には至らず今年度も続きを調査することになった。特に、Ⅱ-4区で確認された塹壕跡から延びる遺構が、『刃春・和仁仕寄陣取図』に主郭部へと続くように描かれているものに相当するのではないかと専門調査委員の意見があり、それを確認することを第一の目標とした。

まず、Ⅰ-1区の調査から行ったが、Ⅰ-2区同様上部からの崩落が激しく、遺構面の確認までかなり表土を剥ぐ必要があった。地山は黄褐色粘質土であり、遺構は全く確認できなかった。

次に、昨年度確認された非常用通路と思われる遺構の延長を追うために、Ⅱ-3区の調査を行った。すると主郭よりの崖面側から凝灰岩の岩盤が確認され、昨年度確認された遺構の延長と思われる凹地が続いていた。しかし、調査を進めていくと主郭から延びる尾根の掘部で途切れており、また、尾根筋に沿って表土を剥いでみたが、全く遺構は確認されず、主郭までは続いていないことが判明した。

その後、昨年度調査を行わなかったⅢ区へと移行し、他の段と同様に二分割して調査を実施した。Ⅲ区は、Ⅰ・Ⅱ区に比べると面積がかなり広く、何等かの遺構があるのではないかと期待が持たれたが、全く確認されなかった。

次いで、これまでの調査で各段ともかなりの整地が行われていることが分かってきたため、Ⅱ・Ⅲ区間の斜面を調査して、その状態を観察することにした。幅約5mと狭い範囲しか調査を行わなかったため断定はできないが、途中に平坦面を設けて犬走り状にしていることが確認できた。

第2節 遺構と遺物

〔Ⅰ区〕

・遺構

昨年度の掘り残しであるⅠ-1区の調査を行ったが、遺構は全く確認できなかった。

・遺物(図3-1)

土師器・陶磁器などの小片がわずかに出土しただけであった。鉛製の鉄砲玉は1個出土し、直径1.15~1.2cmとほぼ球形で重さは6.8g。

[Ⅱ 区]

・遺 構

Ⅱ区も昨年度の残りであるⅡ-3区の調査を行ったが、遺構は全く確認できなかった。

・遺 物(図3-2・3)

I区同様、土師器・陶磁器などの小片がわずかに出土しただけであった。また、鉛製の鉄砲玉は2個出土した。2は、直径0.95~1.5cmと潰れた状態で出土しており、重さは8.2g。3は、直径1.3~1.4cmとほぼ球形をなし、重さは10.1gとやや重い。

[Ⅲ 区]

・遺 構

1・2区に分割して調査を行ったが、2区から22×25cm~46×48cmと大きさにバラツキのある柱穴が6個確認されただけであった。

・遺 物(図3-4~7)

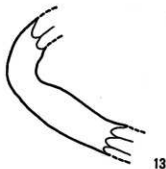
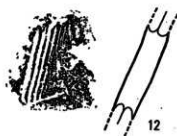
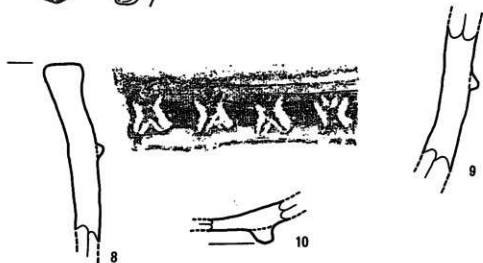
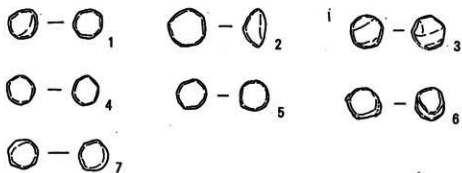
I・Ⅱ区同様、土師器・陶磁器などの小片がわずかに出土しただけで、図化できるようなものは出土しなかったが、ほぼ同じ大きさの鉛製の鉄砲玉が1・2区とも2個ずつ出土した。

4は、直径約1.1cmのほぼ球形で、重さは6.7g。5も直径1.1~1.2cmとほぼ球形で、重さは8.2g。6は、直径1.2cmのほぼ球形と思われるが、サビでやや膨らんでいる。重さは6.7g。7も直径1.1~1.2cmとほぼ球形で、重さは7.1g。

その他の遺物(第3図-8~13)

一括遺物のなかから、6点だけ図化した。

8は瓦質の火舎の口縁部で、外面はやや濁った赤褐色、内面は灰褐色を呈し、胎土には非常に細かな砂粒を含む。内・外面ともヨコナデ調整で、口唇部は面取りしている。また、外面には一条の突帯を貼りつけ、その上部にX状のスタンプを押している。9は瓦質の火舎の胴部である。外面は淡い赤褐色、内面は灰白色で炭化物様の付着物がある。内・外面ともヨコナデ調整で、一条の突帯を貼りつけているが、ヘラでの接合部の調整がまずく、段がついている。10は土師器の埴の高台部である。内・外面ともヨコナデ調整で、胎土には非常に細かな砂粒を含む。11は土師器の皿で、推定底径12.2cm、残高1.6cmである。底部からやや丸味をもって立ち上がっており、内・外面ともヨコナデ調整が施されている。12は瓦質のすり鉢の体部である。内・外面とも灰色で、内面に4本単位の条線が見られる。13は備前焼の甕の口縁部近くで、外面上部は高温のためオレンジ色をしており、外面下部および内面は赤褐色を呈している。胎土には粒の粗い砂粒を多量に含んでいる。



第3圖 出土遺物実測図

第Ⅲ章 ま と め

今年度は、昨年度調査を行った主郭南側斜面に形成された平場の残り部分の調査を実施した。昨年度の区割りでいうと、Ⅰ-Ⅰ区・Ⅱ-Ⅲ区およびⅢ区となる。

昨年度の調査では、Ⅱ-Ⅰ区から柱穴、Ⅱ-Ⅳ区から竈跡と非常用通路と思われる遺構が確認されたため、今年度は非常用通路と思われる遺構の延長を確認するためⅡ-Ⅳ区から調査を開始した。その結果、非常用通路の延長はもちろん、他の調査区からも全く遺構の確認はできなかった。

Ⅱ・Ⅲ区間の斜面に関しては、部分的に削ってみると地山の凝灰岩を調整して中間部に簡単な犬走りのな段を設けていることが判明した。

Ⅲ区においては、地山は主郭側の段落ち部でわずかに確認できるだけで、ほとんどが上段などを造り出す際に出た土などを利用して作られた平場と思われた。

遺物については、例年通り青磁・染付・火舎・すり鉢などの小片がわずかに出土しただけであったが、鉛製の鉄砲玉は7個出土し、この一帯だけで昨年度の18個と合わせて25個となった。今年度出土した玉は、いずれも三匁玉以下の小さなもので、13年間の総計では40個となり、そのうち36個が主郭西側から南側にかけての一帯から出土したことになる。生活用品に比べて戦闘用品が多く出土することは、『刃春・和仁仕寄陣取図』によるとこの一帯が豊臣軍の総大将である小早川秀包の陣と対峙するような位置にあり、また、すぐ東側には攻め手側の攻め口である「仕寄」という文字もみられるところから、このあたり一帯で激しい戦闘が行われたことが想定される。

ここ数年、主郭部から南および南西方向に延びる二本の尾根の間の迫地に形成された平坦部の調査を行ってきたが、平成三年度の調査で掘立柱建物跡1棟と5列の柵列、「弾正屋敷跡」との言い伝えのある先端部から掘立柱建物跡が1棟と井戸跡、昨年度の調査で竈跡と非常用通路が確認できただけであった。このことから、この迫地はかなり大がかりな工事を行うことにより平坦部を造り出しているが遺構が少なく、どのような役割を持っていたかは不明である。際部分に柵列などの遺構があった可能性も考えられるが、調査終了後に埋め戻しを行うため、ある程度、線を残して調査を行ったため確認するまでには至らなかった。

今年度の調査で、この一帯の調査は一応終了し、来年度からは昨年度の専門調査委員会に指摘を受けたように、面として遺構がとらえられるように主郭部周囲の曲輪の調査から行うことにしている。来年度は、『刃春・和仁仕寄陣取図』によると刃春氏が居たと推定される、主郭部南側の曲輪の調査を行う予定であり、何らかの新しい発見が期待される。

写真図版

(1) 調査前状況
(Ⅰ・Ⅱ区 南東より)



(2) 調査前状況
(Ⅰ・Ⅱ区 北東より)



(3) 調査前状況
(Ⅲ区 南東より)





(1) I-1区 (東より)



(2) I-1区 (北西より)



(1) II-3区(東より)



(2) II-3区(東より)



(1) Ⅲ-1区(北西より)



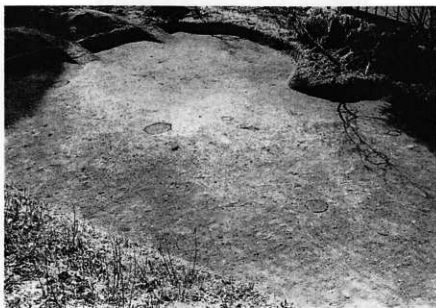
(2) Ⅲ-1区(南東より)



(1) III-2区 (北東より)



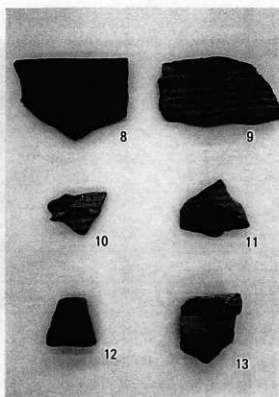
(2) III-2区 (北西より)



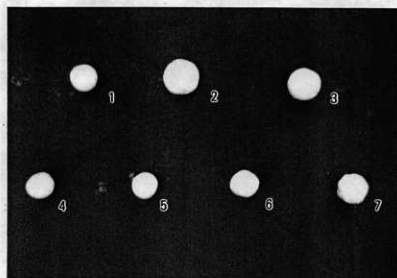
(1) Ⅲ—2区 柱穴検出状況



(2) Ⅲ—2区 柱穴完掘状況



(1) 出土遺物



(2) 鉄砲玉

報告書抄録

ふりがな	たなかじょうあと							
書名	田中城跡Ⅱ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三加和町文化財調査報告							
シリーズ番号	第15集							
編著者名	黒田裕司							
編集機関	三加和町教育委員会							
所在地	〒861-0992 熊本県玉名郡三加和町大字板楠76 Ⅱ0968-34-3111 内線55							
発行年月日	西暦 1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たなかじょうあと 田中城跡	くまもとけんたまなぐん 熊本県玉名郡 みかわまちおおあぎ 三加和町大字 わにあぎふるしろ 和仁字古城	43366		33度 4分 31秒	130度 35分 53秒	1998 ～ 19990331	約900	整備に伴う 範囲および 遺構の事前 確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な異物		特記事項	
田中城跡	城館	戦国時代 末期			青磁・染付・火舎・ すり鉢・土師器な どの小片。 鉛製鉄砲玉 7 個		これといった遺構の 確認はできなかった が、遺物は昨年に引 き続き鉄砲玉が7個 と多く、この一帯だ けで25個の出土とな った。	

三加和町文化財調査報告書 第15集

田 中 城 跡 XIV

1999年3月31日

発 行 三 加 和 町 教 育 委 員 会
〒861-0992

熊本県玉名郡三加和町板橋76

印 刷 熊 本 県 印 刷 セ ン タ ー 協 業 組 合
〒862-8011

熊本市鹿嶋瀬町496-1